

いわゆる育児不安に関する調査研究(1)

— 「育児困難感」の規定要因に関する研究 —

恒次 欽也・庄司 順一・川井 尚

Kinya TSUNETSUGU・Junichi SHOJI・Hisashi KAWAI

(特殊教育教室) (日本子ども家庭総合研究所) (同上・愛育相談所)

I 研究目的

今日、いわゆる育児不安を抱く母親の増加が指摘されることがしばしばである。育児不安に関する総説はここで改めて述べることはしないので、文献1を参照されたい。こうした社会状況を踏まえて、育児不安の本態は何かを明らかにする必要があること、またどのような援助を母親あるいは父親や児を含めた家族全体に考えていく必要があるのかなどを検討していくための基礎的資料を得ることを目的にして、育児不安調査を実施してきた。そして、その結果、育児不安の本態は「不安」というような漠然としたものではなく、日常の子育てに起因する育児へのとまどい(困惑)、子どもへの否定感情や態度からなる心性、すなわち「育児困難感」というべきものであることを明らかにしてきた。(文献2から4)また、この一連の研究からおもに母親援助のための「育児困難感」のプロフィール評定試案も作成した。(文献5)

本報告の目的は、育児困難感のプロフィール評定尺度試案を作成する過程で行われた因子分析の結果に基づき、抽出された育児困難感を規定する要因の検討を行うことである。そのために育児困難感得点を算出し、これを従属変数とし、ほかの複数の要因の得点を説明変数とした重回帰分析を行う。これにより育児困難感に影響を強く及ぼしている要因が明らかになることによって、育児困難感プロフィール評定の解釈を容易にすることができ、育児困難感の強い母親に対する育児相談などの臨床場面において有用に活用できるものとする。

II 研究方法

1 調査項目の選定

文献1から3に用いた調査項目より得られた検討結果をみなおし、更に年齢区分を0-2歳児、2-6歳児の母親用に分け調査項目を選定した。

調査領域は、1. 育児に関する17項目、2. 妊娠、出産後の精神症状に関する5項目、3. 父親に関する18項目、4. 家庭機能に関する15項目、5. 母親と子

どもに関する0-2歳11項目、2-6歳18項目、6. 子どもの問題に関する0-2歳15項目、2-6歳25項目、7. 母親の心の状態に関する21項目、8. 父親の心の状態に関する14項目、9. 生後半年までの乳児の特徴に関する9項目である。なお、0-2歳児用は125項目、2-6歳用は142項目である。(質問票の実際は文献5を参照のこと。なお、その一部の質問項目は表3、表4に掲載した。)

2 調査対象

対象は、0-2歳児を持つ母親1071名、2-6歳児をもつ母親1555名、計2626名である。対象の属性について、子どもの年齢は0歳児427名、1歳児436名、2歳児265名、3歳児144名、4歳児329名、5歳児553名、6歳児446名であり、性別は男児1324名、女児1286名であった。母親の就労は、0-2歳児フルタイム34.4%、パートタイム11.2%、自営5.3%であり、そして主婦40.6%である。2-6歳ではフルタイム18.5%、パートタイム15.4%自営4.4%であり、主婦は56.5%であった。

3 調査方法

調査地域は、札幌市、秋田県由利郡、盛岡市、東京都区内、千葉県佐倉市、松山市、高知県南国市が両年齢群共通地域である。加えて、0-2歳群は、神奈川県海老名市、愛知県春日井市、名古屋市、高知県中村市、福岡市であり、2-6歳群は埼玉県朝霞市であった。調査場所は乳幼児健診、保育所、幼稚園であり、回収方法は健診ではその場で、保育所、幼稚園は園を通して配布回収した。回収率は、正確な配布数がかめないがおおよそ0-2歳群75.0%、2-6歳群77.0%である。

4 整理方法

調査は、0-2歳群用、2-6歳群用に分け調査したが、単純集計の回答傾向を検討したところ0歳児は他の年齢群とは回答に違いが見られ、そこで年齢区分を0歳児、1-2歳児<2歳児は2歳0ヶ月のみ>、2-6歳児に分けて整理した。そして、上述の方法に

よって得られたデータについて、

①全調査項目を主因子法（バリマックス回転）による因子分析を行った。（文献5参照）なお、各項目はネガティブな反応ほど得点を高くするためにRの付いた項目はスコアを逆転して入力した。

②因子分析の結果は表1に示す通りである。各因子を構成する項目群の単純加算を求め、それをその因子における得点とした。得点が高いほどネガティブな状態を示すことになる。

③つぎに「育児困難感」因子（0歳児：第4因子，1-2歳児，2-6歳児各第2因子）を従属変数，他の因子を説明変数として重回帰分析（ステップワイズ法）をおこなった（計算処理はパソコン版 SPSS 8.0J for Windows によった）。なお、「育児困難感」を構成する質問項目群は表3に示した。表内の項目名のRは逆転項目をIは領域1（育児に関する項目）（領域は調査項目の選定参照）を意味している。また，多重共線性の問題は認められなかった。また，分散分析においても重回帰分析に支障のないことを確認した。

④重回帰分析の結果，意味のある説明変数となりえた因子のみそれを構成する質問項目のリストをあげた。（表4）

III 結果と考察

1 0歳児の重回帰分析

第4因子「育児困難感」を従属変数とし，他の8因子を説明変数とする重回帰分析を行った。その結果，調整済みR自乗のもっとも大きなモデル5（R自乗=.463）までが抽出されたが，偏回帰係数のt検定で定数が有意でなかった。そこで，次に大きなモデル4（R自乗=.455）を採用することにした。これに組み込まれた因子は4つであり（表1★印の因子，☆印は育児困難感因子以下同様），第5因子「母親抑うつ傾向」（標準化係数.208以下同様），第9因子「子どもへの気がかり」（.285），第7因子「子どもへのネガティブな感情・態度」（.326），第3因子「Difficult Baby」（.148），であった。

0歳児群の育児困難感に影響を与えるものの中では第7因子がもっとも大きいことがわかった。この「子どもへのネガティブな感情・態度」は表4-1に示したように、「何で叱られているのか子どもには分からないのに叱ってしまう」、「ときどき子どもに入つ当たりしては，反省して落ち込むといったことを繰り返している」、「子どもを許せないことが多い」、「子どもを虐待しているのではないかと思うことがある」などにより構成されている。これらは母親の子どもに対する受容が問題になるかもしれない。つまり，母親としては予期しない，あるいは望まない妊娠・出産の結果として子どもを産んでしまったり，自分が描いていた理想的な赤ちゃん像と実際の赤ちゃんとのズレなどが考え

表1 因子命名リスト（★有効な説明変数と（ ）内は標準回帰係数，☆従属変数の育児困難感）

0歳児
第1因子：夫・父親の問題
第2因子：父親の心の不調
第3因子：Difficult Baby★（.148）
第4因子：育児困難感（純粹）☆
第5因子：母親抑うつ傾向★（.208）
第6因子：家庭機能の問題
第7因子：子どものネガティブ感情・態度★（.326）
第8因子：母親の不安傾向
第9因子：子どもへの気がかり★（.285）
1-2歳児
第1因子：夫・父親問題
第2因子：育児困難感☆
第3因子：Difficult Baby
第4因子：父親の心の不調
第5因子：母親の抑うつ傾向★（.382）
第6因子：家庭機能の問題★（.141）
第7因子：親・きょうだいの問題
第8因子：子どもへの気がかり★（.091）
第9因子：妊娠・産褥期の問題★（.145）
2-6歳児
第1因子：夫・父親問題
第2因子：育児困難感☆
第3因子：父親の心の不調
第4因子：Difficult Baby
第5因子：母親の抑うつ傾向★（.293）
第6因子：家庭機能の問題★（.147）
第7因子：扱いにくい子ども★（.215）
第8因子：子どもの発達問題
第9因子：子どもの対人関係の問題
第10因子：気になる子ども★（.388）

られるように思う。また，自分の思い通りに動かない児に対するいらいら・焦燥感などがその背景にあるように思われる。

つぎに係数が大きいのは第9因子「子どもへの気がかり」で「とても子どものことが気にかかる（領域1と5）」、「子どもの発達が気にかかる」などである。子どもの具体的な事柄，つまり，こういう理由で気にかかるというよりも，とにかく子どものことが気になって仕方ないというのが主なことで，こうした何となしの気がかりがかえって育児の困難を高めていく要因になっている。いわゆる育児不安という漠然とした気分・感情を示すならばこの因子が近いかもしれない。

3番目に第5因子「母親の抑うつ傾向」で「気が減入ることがよくある」、「イライラすることが多い」、「悲観的になりやすい」、「怒りっぽい」などである。育児困難が高いために母親の抑うつ傾向が高くなるというのが一般的な解釈のされ方であるが，この結果はおそらく他の要因によって母親の抑うつ傾向が高くなり，

それが育児の困難感をもたらすものと考えられる。とりわけ0歳児群では産後のマタニティー・ブルーズや産褥期の精神障害なども考慮の内に入れておく必要があるだろう。あるいは母親自身の性格傾向ということもあるかもしれない。

4番目は第3因子「Difficult Baby」である。これは乳幼児の気質のタイプ分けとしてよく知られているものである。そして子ども側の要因として出てきたものであることに注意を払う必要がある。この因子を構成するのは乳児期の「一日の生活リズムが一定しない」、「あまり眠らない」、「一晩に何回も起こされる」、「よく泣いてなだめにくい」などである。他の年齢群の場合は過去のできごと(赤ちゃんのときの印象)として訊いているが、いま0歳児をもつ母親たちの現在の問題として把握されるものである。育児の難しさに基づく最初の課題(夜泣き、睡眠のリズム)になるものであり、それが乳児自身のもつ気質であるにもかかわらず、母親は自分の対応がよくないからではないかといった自責感情にとらわれ、その結果として抑うつ感情に支配されがちになるだろう。あるいはこの子のためにわたしは駄目になってしまう、その思いは容易に子どもへの憎悪・攻撃をひきおこしてしまう、つまり、「子どもへのネガティブ感情・態度」とも重なり合う。こうした気質の児への対応はどの母親にとっても困難であり、この出会いの不幸がその後尾をひかないようにこの時期の育児相談、母親援助が適切に行われる必要性が求められるといえよう。

2 1-2歳児の重回帰分析

第2因子の育児困難感を従属変数とし、その他の8因子を説明変数とする重回帰分析を行った。その結果、調整済み決定係数(R自乗=.326)のもっともおおきなモデル4を採用することにした。このモデルでは4つの因子が影響を与え、第5因子「母親の抑うつ傾向」(標準化係数.382)、第9因子「妊娠・産褥期の問題」(.145)、第6因子「家庭機能の問題」(.141)、第8因子「子どもへの気がかり」(.091)であった。影響度は大きな違いがあり、「母親の抑うつ傾向」がもっとも大きく、「子どもへの気がかり」はあまり影響しないものと思われる。

標準化係数が最大であったのは第5因子「母親の抑うつ傾向」であって「とても心配性であれこれ気に病むことが多い」、「何事にも敏感に感じすぎてしまう方である」、「楽天的でよくよ考えない方である(逆転項目)」、「悲観的になりやすい」などである。(表4-2)この母親の抑うつ傾向は0歳児群、つぎの2-6歳児群にもみられたものである。育児の困難感を増すのは0歳児群の項で述べたとおりであるが、母親自身の気質(抑うつ感を抱きやすい、心配性)、性格的なものもその影響を考慮しておくことが必要だろう。

つぎに第9因子「妊娠・産褥期の問題」は「出産後、一時的に涙もろくなったり、淋しくなったりしたことがある」、「出産後、気持ちが沈み、とてもおっくうになにもする気がしない時期がしばらく続いた」などから成り立っている。0歳児群ではなく、1歳児を持つ母親にとり、妊娠・産褥期の問題がここで改めて浮き彫りにされるのは以外の感があるが、妊娠・産褥期をうまく乗り越えられなかった母親達がここへきてその積み残された課題が突きつけられる形になったものと思われる。従来、マタニティー・ブルーズなどは生後数ヶ月以内に発症するとされているが、上記の母親の抑うつ傾向の問題も考えあわせると、従来の説よりも産後の母親の精神的な問題は1歳以降にも尾をひくものと考えておかななくてはならないと思われる点で興味深い結果である。

第3に第6因子「家庭機能の問題」は「家庭の中が何となくしっくりいかない」、「何かと家庭内にもめごとが起こる」、「家庭内に心配事がある」などにより構成されている。家庭機能は母親が子育てしていくためにサポータティブに機能している必要がある。これが不安定であったり、十分に機能を発揮していないならば母親は子育てに集中したり、専念することが困難になることは容易に推測できる。

4番目に第8因子「子どもへの気がかり」である。これは「とても子どものことが気にかかる(領域1と5)」、「子どもの発達が気になる」からなっている。先に述べた0歳児と同様の意味を与えているものと思われる。ただし、標準化係数はあまり大きくないのでこの年齢での育児困難感に与える効果は小さいものである。

3 2-6歳児の重回帰分析

第2因子の育児困難感を従属変数とし、その他の9因子を説明変数とする重回帰分析を行った。その結果、モデルは8つ抽出され、第8モデルのR自乗は.553と比較的大きなものであったが係数のt検定や標準化係数のスコアなど(0.1未満が多い)を勘案すると、第4モデルで十分な説明がつくものと考え、これを採用することにした。調整済み決定係数は.541であった。このモデルでは4つの因子が影響を与え、それは第10因子「気になる子ども」(標準化係数.388)、第5因子「母親の抑うつ傾向」(.293)、第7因子「扱いにくい子ども」(.215)、第6因子「家庭機能の問題」(.147)であった。

標準化係数が最大であったのは第10因子「気になる子ども(子どもへの気がかり)」であった。これは「とても子どものことが気になる(領域1と5)」、「子どもの発達が気になる」などの項目群で成り立っている。

(表4-3)0歳児、1-2歳児群にも出ているが、この年齢群では最大になっている点で他の年齢群とは

異なる。子どもとの関係が深くなるにつれて子どものさまざまな面（おそらく子どもの性格的なこと、癖、問題行動やそれに対する対応の困難さ）に気がかりを感じ、それが不安を呼び起こし、そして、育児の困難感をもたらすものといえるだろう。とりわけ子どもの発達の遅れがはっきりと母親にも認識できるようになる年齢であることも影響しているだろう。

つぎに第5因子「母親の抑うつ傾向」はこの年齢群にも現れた。そして、これは「とても心配性であれこれ気に病むことが多い」、「何事にも敏感に感じすぎてしまう方である」、「楽天的であまりよくよ考えない方である（逆転項目）」、「悲観的になりやすい」、「気が滅入ることがよくある」などといった項目群から成立している。前項でも述べたように各年齢群に一貫して母親のこうした性格傾向が影響を与えていることを示唆している。全体をとおしてあらためて考察したい。

第3に第7因子「扱いにくい子ども」は「怒りっぽい」、「かんしゃくをよく起こす」、「気分が変わりやすい」という項目群から構成されていた。この結果は第1にあげた「子どもへの気がかり」とは異なり、より具体的に子どもの行動に困惑を感じるものとなっている。こういう点では0歳児群のDifficult Babyに近い気質的なものであるが、乳児期の育てにくい、取り扱いの難しさとは異なっている。2-6歳児群では子どもの自己主張が強くなる時期であり、母親を含めた周囲と衝突することも多くなる。母親側からみればなんでもすなおにいうことをきいていた子が自分の思惑通りにいなくなってきたことに困惑を感じ、対応に困難を感じていることが現れているものと思われる。上で述べた子どもへの気がかりの具体的な中味といえるかもしれない。

4番目に第6因子「家庭機能の問題」である。

「家庭の中が何となくしっくりいかない」、「何かと家庭内にもめごとが起こる」、「家庭に自分の居場所がないと思う」、「しゅうとめなどの家族の干渉が多い」という項目群であるが、同じ要因であってもいままでの年齢群になく注目されるのは居場所のなさ、家族の干渉である。より具体的なものが加わっていることに注意を払う必要がある。家庭が母親やその子どもにとっても必ずしも安らぎの場でないことがあり、それは子育ての困難感へと直結してくるものであろう。

4 全体をとおして一育児困難感の規定要因

表2に有効な説明変数のみのリストをあげた。3つの年齢群に共通して登場するのは「子どもへの気がかり」「母親の抑うつ傾向」の2要因である。さらに1-2歳児群と、2-6歳児群に共通するのは「家庭機能の問題」であった。年齢群に固有のものは0歳児群では「Difficult Baby」と「子どもへのネガティブな感情・態度」であり、1-2歳児群では「妊娠・産褥期

の問題」、2-6歳児群は「扱いにくい子ども」である。

各年齢群に共通する要因「子どもへの気がかり」や「母親の抑うつ傾向」は上記にも述べたことであるが、0歳から7歳未満まで一貫して影響している要因として十分に注意を払わなくてはならない。

子どもへの気がかりは「何となく」であり、子どもの具体的な行動でないという点で今後、その中味に関して、つまり、子どものことに関して漠然とした不安傾向を持ちやすい、あるいは、抑うつ傾向の強い母親達に生じやすいことなのか、子どもの具体的な問題行動と関連しているのか、検討しておく必要があるだろう。なお、上にも述べたが0歳児群では「Difficult Baby」、2-6歳児群では「扱いにくい子ども」要因があがっているが、これが関連する問題の一部なのかもしれない。

「母親の抑うつ傾向」はこのような状態に陥ることになった背景がここでは不明なのではっきりしたことはわからない。子育てそのもの、家庭内での母親の立場、母親自身の問題など、母親自身の性格傾向などさまざまな考えられる。しかし、いずれにしても抑うつ傾向はときとして母親に極端な行動（母子心中、子どもへの虐待など）をとらせるものになるものであり、健診の場などでの母親面接にあたっては十分な配慮が必要である。

0歳児群を除く1歳から6歳までに共通する「家庭機能の問題」は家庭生活が長くなっていくことで家庭内の歪み（制度疲労的なものも含まれるだろう）がいろいろな面で現れてくることによるのかもしれない。たとえば、夫婦の問題や、実家を巻き込んだような家族の問題、子育てに対しての父親や周囲のサポートが希薄になっていくことなどが考えられようか。このあたりは個々の家庭の事情というべきものであって、相談のプロセスの中で明らかになるものであろう。

年齢群固有の要因はいずれもその時期の母子関係や子どもの変化—たとえば気質が強く全面に現れやすい乳児期や、2歳以降の第一次反抗期が生じる時期などが影響しているものだろう。したがって、相談にあたっては児の年齢にそったものが求められ、ある時期になればある要因は稀薄になったり、強くなったりすることを念頭に入れた相談が必要になるといえる。

育児困難感を規定する要因としてはあがってきた説明変数によりすべて説明できるとは思えないが、これらの要因が大きな働きをもっていることは確かだと思われる。また、要因間の関連を考えると、それぞれが影響を与えあっているだろうが、上記に述べた推測の域をでない。さらに、育児困難感の高まりが説明要因側の問題をより深める可能性もあるだろう。そういう点で、要因間の関係は因果的であるよりも、相互影響的な相対的な相関関係であるといえることにも留意したい。

表2 重回帰分析による有効な説明変数リスト

0歳児 第3因子: Difficult Baby 第4因子: 育児困難感(純粹) ☆ 第5因子: 母親の抑うつ傾向★ 第7因子: 子どものネガティブ感情・態度 第9因子: 子どもへの気がかり★
1-2歳児 第2因子: 育児困難感☆ 第5因子: 母親の抑うつ傾向★ 第6因子: 家庭機能の問題◎ 第8因子: 子どもへの気がかり★ 第9因子: 妊娠・産褥期の問題
2-6歳児 第2因子: 育児困難感☆ 第5因子: 母親の抑うつ傾向★ 第6因子: 家庭機能の問題◎ 第7因子: 扱いにくい子ども 第10因子: 気になる子ども(子どもへの気がかり) ★

注: ★3年齢群共通 ◎1-2歳, 2-6歳共通

ところで、育児困難感が高いからといって多くの母親達はかならず育児ノイローゼ状態に陥るとは限らないし、子どもへの虐待行動に走るとは限らない。育児困難感を強く抱く母親達はそのようになる可能性を強く持っているひとたちであると考えられる。いいかえると、育児困難感が高くてもそれによって行動化してしまわないようにする要因があるということである。こうした行動化を抑制する要因があるとすればそれは育児困難感を高める要因の逆なのかという問題でもある。つまり、「母親の抑うつ傾向」がない、あるいは低い、とか「子どもが気がかり」でないということなのかということである。おそらく、そうした一面は消極的に育児困難感を低減させるに過ぎないものであって、育児困難に積極的に対応していくものではないように思う。今回はこうした育児困難をカウンターバランスしたり、育児困難感を抱きながらもなんとかやっていける、それを支える要因に関しての分析はできなかった。今後の課題として検討していきたい。

さらに、臨床的に母親を援助していくことに関わっていえば、育児や家庭など、ときには仕事も含めてストレスや育児困難感を引き起こしやすい母親に対して、どのようなストレス・コーピング(ストレス・マネジメント)が有効なのかといったことも考える必要があるだろう。

5 ま と め

最後に、調査用紙の区分であるが今回、0-2歳児用と、2-6歳児用に分けて作成、施行した。しかし、結果的には0歳児は特有であり、別に考える必要のあることが分かった。質問項目の構成が年齢に妥当であったかどうか問われる。そこで、現在、98年度版を作成し、実施中であるが、0歳児用、1から2歳未満児用、2から3歳未満児用、3から7歳未満児用の4種類の調査票を作成して、この問題の検討をすすめてつづつある。この年齢区分は乳幼児健診の乳児健診(4ヶ月や9, 10ヶ月児健診)、1歳児健診、法定の1歳半健診、1歳半健診後の通常2歳以降の事後相談、3歳児健診、就園・就学前の健診時に有効になるように構成していきたいと考えている。そして、今後、臨床的に妥当であるかを検討し、現場での活用を考えていきたい。

さらに、重回帰分析を行ったが、今後は要因間の関係が相対的であっても一種の因果モデルを作成し、パス解析(共分散構造分析)等を援用して、育児困難感を規定する要因間の関連を検討していきたい。

また、このプロフィール評定法を用いた縦断的な研究が望まれる。

謝辞 本研究をすすめるに当たりご協力いただいた日本小児保健協会発育委員はじめ、各地の小児科、保育園、幼稚園の先生方、そしてお母さんたちに深く謝意を表したい。

文 献

- 1) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也: 育児不安に関する基礎的研究。日本総合愛育研究所紀要, 30集, 27-39, 1994.
- 2) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也: 育児不安に関する臨床的研究一幼児の母親を対象に一。日本総合愛育研究所紀要, 31集, 27-42, 1995.
- 3) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也: 育児不安に関する臨床的研究II一育児不安の本態としての育児困難感について一。日本総合愛育研究所紀要, 32集, 29-47, 1996.
- 4) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村 敬・恒次欽也: 育児不安に関する臨床的研究III一育児困難感のアセスメント作成の試み一。日本総合愛育研究所紀要, 33集, 35-56, 1997.
- 5) 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中一: 育児困難感のプロフィール評定試案一。日本子ども家庭総合研究所紀要, 34集, 93-111, 1998.

表3-1 0歳児：育児困難感（第4因子）

注：R逆転項目：I1領域1以下同様

項目	負荷量
I1-01R	何となく育児に自信が持てないように思う 0.609
I1-02R	育児についていろいろ心配なことがある 0.450
I1-04	子どもをうまく育てていると思う 0.586
I1-06R	母親として不遜格と感じる 0.476
I1-16R	私は子育てに困難を感じている 0.490
I1-17R	子どものことでどうしたら良いか分からなくなることがよくある 0.403
I5-4	おおよそ、子どものことは理解できていると思う 0.485
I5-8R	どのようにしついたらよいかわからない 0.602

表3-2 1-2歳児：育児困難感（第2因子）

項目	負荷量
I1-01R	何となく育児に自信が持てないように思う 0.707
I1-02R	育児についていろいろ心配なことがある 0.511
I1-03R	子どものことがわずらわしくてイライラする 0.618
I1-04	子どもをうまく育てていると思う 0.580
I1-05R	子どもを育てることが負担に感じられる 0.541
I1-06R	母親として不遜格と感じる 0.683
I1-07R	子どもを虐待しているのではないかと思うことがある 0.589
I1-13R	子どもがかわいいと思えないことがある 0.519
I1-15R	ときどき子どもに八つあたりしては、反省して落ち込むと いったことを繰り返している 0.578
I1-16R	私は子育てに困難を感じている 0.624
I1-17R	子どものことでどうしたら良いか分からなくなることがよくある 0.612
I5-2R	子どもを許せないことが多い 0.490
I5-3R	何で叱られているのか子どもには分からないのに叱って てしまう 0.523
I5-4	おおよそ、子どものことは理解できていると思う 0.442
I5-8R	どのようにしついたらよいかわからない 0.514
I7-05R	イライラすることが多い 0.552
I7-09R	おこりっぽい 0.524

表3-3 2-6歳児：育児困難感（第2因子）

項目	負荷量
I1-01R	何となく育児に自信が持てないように思う 0.728
I1-02R	育児についていろいろ心配なことがある 0.499
I1-3R	子どものことがわずらわしくてイライラする 0.600
I1-04	子どもをうまく育てていると思う 0.584
I1-06R	子どもを育てることが負担に感じられる 0.586
I1-06R	母親として不遜格と感じる 0.728
I1-07R	子どもを虐待しているのではないかと思うことがある 0.580
I1-08R	特に理由はないが子どものことがとても気になる 0.412
I1-13R	子どもがかわいいと思えないことがある 0.512
I1-15R	ときどき子どもに八つあたりしては、反省して落ち込むと いったことを繰り返している 0.583
I1-16R	私は子育てに困難を感じている 0.656
I1-17R	子どものことでどうしたら良いか分からなくなることがよくある 0.618
I5-2R	子どもを許せないことが多い 0.450
I5-3R	何で叱られているのか子どもには分からないのに叱って てしまう 0.469
I5-4	おおよそ、子どものことは理解できていると思う 0.436
I5-6R	子どもとしっくりいかないことがある 0.465
I5-13R	どのようにしついたらよいかわからない 0.626
I5-15R	とめどなく叱ってしまうことが多い 0.568
I7-05R	イライラすることが多い 0.501
I7-09R	おこりっぽい 0.518

表4-1 0歳児：育児不安項目因子分析

第3因子 Difficult Baby

項目	負荷量
I9-1R	乳児期：あまり眠らない 0.652
I9-3R	乳児期：よく泣いてなだめにくい 0.591
I9-5	乳児期：おとなしく手がかららない 0.426
I9-6R	乳児期：わけもわからず泣く 0.584
I9-7R	乳児期：一日の生活リズムが一定しない 0.689
I9-8R	乳児期：一晩に何回も起こされる 0.627
I9-9R	乳児期：抱っこや外に連れ出すなど寝るまでに手がかかる 0.643

第5因子 母親抑うつ傾向

項目	負荷量
I7-06R	イライラすることが多い 0.583
I7-06R	悲観的になりやすい 0.552
I7-08R	精神的に不調 0.466
I7-09R	おこりっぽい 0.487
I7-10	とても幸せな気分でご過ごしている 0.436
I7-11R	何ともいえず淋しい気持ちにおそわれることがよくある 0.457
I7-12R	気が滅入ることがよくある 0.539
I7-13	楽天的でありあまりよくよく考えない方である 0.414

第7因子 子どものネガティブ感情・態度

項目	負荷量
I1-03R	子どものことがわずらわしくてイライラする 0.407
I1-07R	子どもを虐待しているのではないかと思うことがある 0.553
I1-15R	ときどき子どもに八つあたりしては、反省して落ち込む と いったことを繰り返している 0.654
I5-2R	子どもを許せないことが多い 0.557
I5-3R	何で叱られているのか子どもには分からないのに叱って てしまう 0.674

第9因子 子どもへの気がかり

項目	負荷量
I1-02R	育児についていろいろ心配なことがある 0.422
I1-08R	特に理由はないが子どものことがとても気になる 0.705
I1-10R	いつも子どもと一緒にいないと気持ちが落ち着かない 0.402
I1-12R	子どもの発達に気がかかる 0.482
I5-1R	とても子どものことが気になる 0.739

表4-2 1-2歳：育児不安項目因子分析

第5因子 母親の抑うつ傾向

項目	負荷量
I7-06R	悲観的になりやすい 0.474
I7-12R	気が滅入ることがよくある 0.421
I7-13	楽天的でありあまりよくよく考えない方である 0.574
I7-14R	何事にも敏感に感じすぎてしまう方である 0.640
I7-15R	とても心頭性であれこれ気に病むことが多い 0.754

第6因子 家庭機能の問題

項目	負荷量
I4-02R	家庭の中が何となくしっくりいかない 0.669
I4-03R	何かと家庭内にもめごとが起きる 0.571
I4-04R	家庭に自分の居場所がないと思う 0.435
I4-05	家族としてのまとまりを感じる 0.408
I4-06R	家庭内に心配事がある 0.453
I4-07R	家庭以外にやすらぎをもとめたいと思う 0.413

第8因子 子どもへの気がかり

項目	負荷量
I1-08R 特に理由はないが子どものことが気になる	0.573
I1-10R いつも子どもと一緒にいないと気持ちが落ち着かない	0.428
I1-12R 子どもの発達が気にかかる	0.524
I5-1R とても子どものことが気になる	0.673

第9因子 妊娠・産褥期の問題

項目	負荷量
I2-01R 妊娠中、動悸がしたり落ち着かず、不安におそわれたことがある	0.438
I2-03R 出産前後、夫が面会に来ないなど淋しく、寂しい思いをした	0.483
I2-04R 出産後、一時的に涙もろくなったり、淋しくなったりしたことがある	0.701
I2-05R 出産後、気持ちが沈み、とてもおっくうでなにもする気がしない時期がしばらく続いた	0.671

第6因子 家庭機能の問題

項目	負荷量
I4-02R 家庭の中が何となくしっくりいかない	0.632
I4-03R 何かと、家庭内にもめごとが起きる	0.628
I4-04R 家庭に自分の居場所がないと思う	0.583
I4-05 家族としてのまとまりを感じる	0.453
I4-06R 家庭内に心配事がある	0.453
I4-10R しゅうとめなどの家族の干渉が多い	0.487
I4-11R 自分の親や夫の親に子どもをとられたように感じる	0.465

第7因子 扱いにくい子ども

項目	負荷量
I6-09R 怒りっぽい	0.715
I6-10R 気分が変わりやすい	0.578
I6-15R かんしゃくをよく起こす	0.607
I6-21R 乱暴	0.549

第10因子 気になる子ども (子どもへの気がかり)

項目	負荷量
I1-02R 育児についていろいろ心配なことがある	0.405
I1-08R 特に理由はないが子どものことがとても気になる	0.657
I1-09R よその子どもと比べて落ち込んだり自信をなくしたりすることがある	0.429
I1-12R 子どもの発達が気にかかる	0.468
I5-01R とても子どものことが気になる	0.648

表4-3 2から6歳児：育児不安項目因子分析

第5因子 母親抑うつ傾向

項目	負荷量
I7-06R 感情的になりやすい	0.597
I7-11R 何ともいえず淋しい気持ちにおそわれることがよくある	0.465
I7-12R 気が滅入ることがよくある	0.565
I7-13 楽天的であまりくよくよ考えない方である	0.606
I7-14R 何事にも敏感に感じすぎてしまう方である	0.657
I7-15R とても心弱性であれこれ気に病むことが多い	0.742
I7-17R 不安や恐怖感におそわれることがよくある	0.473

(平成10年9月10日受理)